

この中風の人がイエスのところにくるためにはいろいろな障壁があったと思われます。病んだ身体を人前にさらすのには苦痛が伴います。現在は多少よくなったものの、日本でも障がいのある身体を人前にさらすのは恥だという意識がいまでも支配的です。宗教意識が強い当時のユダヤ社会では、障がいは罪の結果だという支配的な意識にまず打ち勝たなければならなかったはずですが。また、イエスの周りには群衆が群がっており、戸口あたりまで隙間もないほどであった(2節)ので、人垣をかき分けてイエスに近づくこともなかなかできなかったのです。

そのような状況下で、この中風の人の知人、友人たちが『イエスがおられるあたりの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした』(4節)のでした。原語でみると、屋根をはがしたのではなく、穴を「掘った」となっています。ユダヤの家の屋根は、日本の昔の土壁と同じように、沢山の木で張りを重ねて、そこに泥で塗った天井をつくりました。しかし、それでは異邦人のギリシア人たちが理解できないので、屋根をはがして掘ったと表現しているのです。

いずれにせよ、ここには、あらゆる障壁を打ち破り、イエスに近づこうとする、物凄ひたむきさがあります。イエスは、この姿に彼らの信仰の姿を見たのでした(5節)。信仰は頼るべきものに向かつて、ひたすらそれを呼び求め、ひたすらそれに近づこうとするものです。このような信仰のあるところでイエスは驚異的な力を発揮されるのです。たとえば、長血を患っていた女性を治癒したとき、イエスは『娘よ、あなたの信仰があなたを救った』(5章34節)と言いました。幼い娘の瀕死の姿に狼狽した会堂長に対しては『恐れることはない、ただ信じなさい』と命じました(5章36節)。ですから、人々の側に信仰が無い場合には無力となるのです。郷里に帰ったときに何も力ある業としての奇跡をイエスは行うことができなかったと報告されているのは、郷里でイエスを信じる人がいなかったからです(6章5節)。

ここで求められている信仰とは、人間が神の前に立つときに必要なものです。神の力を受け取る意志が無ければ、イエスも奇跡を行うことができないということを表しています。つまり、外なる神の力を感じ取るための「内なる心の促し」があるかどうか問われているのです。砂鉄が磁気を帯びた磁石によって生きもののように変化し、磁気に吸い寄せられていくように、人の心は神の前で、その人格的な働きかけに対して、まるごとあらゆる障壁を乗り越えて近づいて行くこととするのです。私たちは信仰を動的に理解しなければなりません。恵みをいただいて、慰めをいただいて、平安に過ごすことだけを目指すならば、その信仰に動きはありません。悩みを抱かないような平安な心の持ち方が信仰生活のゴールのように考えてしまう信仰は、静的な信仰です。しかし、信仰は神の意志と、人間の人格とが触れあい、神の意志に対応していくなかで形成されていくものです。そして、信仰者の生命を奮い立たせ、燃え上がらせ、突き動かすものです。

この中風の男性をイエスに出会わせようとした4人の友人たちは、神が近づいて下さることによって、恵みの磁場の影響下に入ることになった人間を象徴しています。神の磁気の影響を受けた者は、自らの主体性をもって、全力で神を求め、責任をもつてこの世で生きていく者とされるのです。イエスが屋根を破って押し入ってきた人たちの姿に、彼らの信仰を見たように、私たちの信仰が神に見える形でこの世で示すことが求められるのです。

そして、この中風の男性がイエスに近づいたことで、イエスから『あなたの罪は赦される』（5節）という言葉をいただくことができたのです。原語の「あなたの罪は赦される」は受動形なので、「神があなたの罪を赦した」と理解すべき言葉です。なお、原文の有力な写本の中には、「赦される」という現在形と、「赦された」という完了形の両方があります。現在形で理解すると「いま赦されている」という理解になります。いずれにしても、律法学者たちが心の中で誤解したように、イエスが罪の宣言をしたのではなく、神があなたの罪を赦したとイエスは言っているのです。つまり、罪の赦しを行う神の全能さということを宣言したのです。また、ここでの『罪』は複数形なので、この場だけの罪を赦しているわけではありません。主イエスが「あなたの罪は赦された」と宣言するとき、それは、その本人の存在に関わる諸々の罪がすべて赦され、人間としての回復を受けて、神によって存在そのものが肯定されたことが宣言されているのです。罪の赦しの宣言によって、中風の男性に全人的な回復が起こったのです。

人間の病気や不幸は神の意志ではありません。神の意志は人間に生命を与え、祝福をもたらすことにあります。にもかかわらず、私たちは病気や不幸に絡め取られると、不幸な自分は罪の支配下に置かれたと理解してしまいます。神によって創造されて、神が生命を与え、神によって祝福の下のおかれているにもかかわらず、です。因果応報の思想によって自らを罪の下においてしまうのです。あるいは逆に、病気や不幸を神の責任にして神を呪ってしまうようなことが起こるのです。これらの態度は、いずれも自分が神の恩寵の下にいるとかんがえておらず、自らの意志で神に逆らっている状態です。それは神の導きを排除している生き方といえるものです。

見方を変えれば、病気や不幸は私たち人間の人格の中心で起こっていることではなく、その周辺で起こっていることなのです。もし、その人の人格が病気や不幸の支配下にあるとしたら、それは病気や不幸な出来事が人格の核を脅かしているからです。だから、イエスは、罪の赦しを病気の癒しよりも先に行っているのです。罪は病気よりも深刻な、生命の源なる神からの離反を生みだしているのです。神から疎外された状態なのです。そして何よりも霊的に死んだ状態なのです。それが罪の赦しの宣言によって回復させられたのです。

ところが、このイエスの罪の赦しの宣言に抵抗感を覚えた人々がいました。そこに居合わせた律法学者たちです。彼らは人間に対して罪の赦しを宣言できるのは神だけであって、それを人間の判断で行うことは冒瀆行為だと受け止めたのです。当時のユダヤ教において、罪の赦しを受けられるのは健康なユダヤ人だけでした。ですから

中風の病人はその罪の赦しを宣言される存在ではなかったのです。病氣も治っていないのに病人に罪の赦しの宣言が下されることはありえないことでした。そういうユダヤ社会での共通認識があるなかで、イエスは中風の人に対して、罪の赦しの宣言を行ったのです。『神おひとりのほかに、いつたいだが、罪を赦すことができるだろうか』（7節）という律法学者たちの反応は当時の社会通念からみれば当然のものだったのです。

しかし、罪の赦しが先行しなければ、この中風の男性の全人格的な回復はありえないのです。中風の男性に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらがたやすいか、という設問は、以上のような文脈で見えていく必要があります。人間のレベルでいえば、イエスは神のように罪の赦しが宣言できないので、中風の人に対して罪の赦しを宣言することはおかしなことでした。ですから、神によってあなたの罪は赦されている、という言い方をしたのです。ただし、このようにイエスが言った背景には、十字架の上ですべての人間の罪を引き受けて死んで行くイエスが、あなたの罪全部を、これから私が引き受けるのだから、もう中風を自分自身の罪の結果だと考えないでいいのだよ、という思いが横たわっていたことを見落としてはなりません。ですから、一人の中風の人を癒してもらおうとして運んできた4人の信仰を見て、イエスは罪の赦しの宣言を行ったのです。中風の人を癒してもらいたいという思いで運んできた4人の人たちの信仰に、他者のために労力を惜しまない姿を見たのですが、それはまた、これから十字架ですべての人間の罪を担う自分の姿と二重写しになったのです。罪赦されて私たちの人格は神の前に立っているのです。神との関係の根源的な破れは、個人個人の周辺の状況によって自分の人格に影響を及ぼしている苦悩や罪から解放されていないからです。神は人間のように、どこが悪かったんだと思う？などと反省を迫るお方ではありません。ただ、神は『あなたの罪は赦されている』と宣言されて、私たち一人ひとりに臨んで下さるお方です。この恵みに気づかされて、神と隣人の前に立って生きていきたいものです。